

平成16年度家畜ふん尿処理利用研究会報告

平成16年11月24～25日、「つくば農林ホール」及び畜産草地研究所（つくば）において、「環境3法施行後の課題と新技術の展開」をテーマとし、全国から207名の参加を得て開催された。本研究会は昭和42年に第一回が開催され、途中、何度かの中断や、名称変更もあったものの、数えて25回目であった。

畜産環境対策の具体化は、わが国の農政上の喫緊の命題の一つである。「家畜排泄物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」に基づく管理基準が、本年11月より完全施行されたことを受け、本研究会ではその排泄物処理の状況を確認し、新たな研究課題の抽出と管理適正化の定着に向けた検討の結果は、「耕地への還元と、バイオマス資源利用による家畜排泄物の利用拡大」として総括され、今後の研究方向が示された。

研究会では、生産局畜産部から「野積み・素堀り禁止の中で危惧された農家数の大幅な減少は認められていない」との報告があり、参加者一同、胸をなで下ろした。排泄物の耕地への還元については、最新の取り組みとしてイネ育苗における利用、地域単位の環境改善事業が報告され、畜草研圃場におけるキャベツ作については圃場見学も含

め紹介があり、研究の継続深化と利用場面のさらなる拡大が必要であることが確認された。

バイオマス資源利用については、都市圏における複合メタン発酵による循環システムの構築や、欧州でなされているコ・ジェネレーションについて我が国での展望、UASBプラント発生メタンによるバイオディーゼルエンジン実機稼働状況等が紹介され、理解の共有を図るとともに、売電価格など政策的支援の重要性も提起された。さらにコスト低減の面からは、図面発注方式による汚水処理施設の設置について、瑕疵責任、性能保証の必要性の有無まで踏み込んだ討議が行われ、本方式に対する期待の大きさが示された。

（畜産環境部長 市戸万丈）



UASBプラント発生メタンによるバイオディーゼル稼働の説明



研究会1日目の様子



畜草研圃場における堆肥施用連作キャベツの育成状況見学